

情

報とは何か。毎年、大学の講義で学生にこの問いを投げかける。情報を冠する学科に属する学生でもこの漠然とした問いに戸惑うが、やがて議論を重ねると「情報は人と人との間で伝えられるもの」という答えに行きつく。それではその伝えられるものは何か。

例えば道を築く。獣は餌を求めて森の中をさまよひ、草木を踏みしめ、いつの間にか獣道ができるが、文明をもつ人間が築く道はもつと計画的である。土地を俯瞰した地図を作り、その上でどのような道を作るのか計画を練り、それをもとに現地で道を築く。このプロセスを「情報」という観点から見れば、土地の状態を測量や調査によって「情報」として得て、設計ではそれをもとに道のかたちを新たな「情報」として創り出し、施工ではその「情報」を現実の空間に刻むという役割を担う。その根源となる情報をたどれば、例えば「街をつなぐ道を作る」という目的、さらには「豊かな国土を築く」等の理念もその上位の情報として存在している。すなわち、今日の社会インフラは「情報の連鎖」によってかたち作られているのではないか。

このような「情報の連鎖」を考えたとき、現在の社会インフラ構築のプロセスが必ずしも最適化されていないことに気づく。情報の連鎖は年度や業務で縦横に細分化され、その網を超える度に「情報」は図面という媒体を介して伝えることが求められる。そしてこの連鎖に携わる

各 人 各 説

社会インフラと情報連鎖の構造

宮城大学 事業構想学群価値創造デザイン学類 教授

蒔苗耕司

Koji Makanae



人たちは目先の情報を受け取り、情報を加工または新たな情報を付加して次の工程に手渡すことに気を取られ、総体としての「情報連鎖の構造」を顧みることがない。九〇年代以降、製造業では三次元CADやERPが普及して、リエンジニアリングが急速に進んだ。建設業でも三次元CADや建設ロボットが普及しつつある。改めて情報を有機的に連鎖させるべく、プロセス全体を見直す時期に来ているのではないだろうか。そして情報を、世代を超えて長期にわたってマネジメントしていくための仕組みを創ること、そのための組織のあり方、それを担う情報人材の育成も重要な課題である。

さらに言えば、冒頭で述べたように、情報は人と人との間で伝えられるべきものであるが、伝えられるものはかたちなどではなく「心」である。複数の更新サイクルを経た歴史的な建造物である伊勢神宮や錦帯橋は二〇年前後という短期間での改築を繰り返すことにより、人々との間での技術の伝承、すなわち心を伝えてきている。このことは今日の社会インフラが目指す長寿命化と矛盾する。社会インフラの寿命が技術者の寿命を大きく上回り、インフラが更新になる頃には設計時の心は伝わらない。BIMやCIM等の情報モデルが議論される中で、設計での意思決定の過程などを含め、「心」にかかわる情報を未来に伝える仕組みを創ること、これから取り組むべき課題であると考ええる。